

石仏あれこれ

シリーズA 石仏を訪ねる

A1 百萬遍・知恩寺 1978

森隆一



知恩寺・御影堂（本堂）（知恩寺ホーム・ページより）

AI. 百萬遍・知恩寺 1978

本誌にちなんで、第1回は百萬遍・知恩寺を取り上げることにする。下に引用した百万遍念仏や、毎年11月に開催される古本まつりなどで知られている。古本まつりは今年で45回ということから、毎年開催されていれば、1978年に始められたことになる。一方、この墓地には丸彫りや舟形後背付きの立派な墓標石仏が数多くみられることは殆ど知られていないと思われる。筆者も五劫思惟阿弥陀仏を除いて、本稿を書いているうちに認識したものである。

Wikipedia「百万遍念仏」から、

元弘元年(1331年)、後醍醐天皇の命を受けた善阿が7日間にわたって百万遍念仏を行って達成させ、疫病を鎮めたとされている。彼が居住した知恩寺の別名「百万遍」はその時の褒賞として授けられた寺号である。

[知恩寺のホーム・ページ](#)から、「百萬遍知恩寺の歴史」から借用する。

浄土宗をお開きになられた法然上人は今から約八百数十年前、百萬遍知恩寺の前身であり、賀茂の禅坊と当時呼ばれていた賀茂の神宮寺に住まわれました。そして都の人々に「念仏のみ教え」をお説きになられたのです。建暦二年(一一二二)正月二十五日法然上人は入滅され、法然上人の直弟子である勢観房源智上人が師の恩に報いるためには「恩」を「知」らなければならぬと知恩寺と名付けられました。

元弘元年(一三三一)第八世善阿空圓上人の時、地震がもとで都に疾病が蔓延しました。それに心を痛めた後醍醐天皇の勅命を受けて弟子らと共に七日七夜にわたって百万遍の念仏を称えながら大念珠繰りをしたところ疫病が治まったことから「百萬遍」の号が下賜されました。その後幾度かの移転を経て、江戸時代の寛文二年(一六六二)第三十九世中興の光譽萬靈上人によって現在の地に再興されました。

伽藍の中心的存在である現在の御影堂は第三十九世光譽萬靈上人によって寛文二年(一六六二)に建てられたものを第四十八世震譽知巖上人が宝暦六年(一七五六)に一回り大きくして総檜造りに改めたものです。

これより、1662年に建てられたから、石仏は江戸時代以降のものであるう。

本堂右手の道路を北に進むと墓地の門に至る。門内左手に石仏群がある。



この写真を撮ったのは1978年であり、2011年には次の写真のようにな
っていた。



冒頭の写真と比べれば、無縁仏と思われる小石仏の数が増え、石碑的なものも加わっている。これらからは、六地蔵のかわりに設置しているとは考えにくく、2つの地蔵も無縁仏ではないかと考える。

コトバンク「六地蔵(仏教)」日本大百科全書「六地蔵(仏教)」の解説
六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)のそれぞれにあって、衆生の苦悩を
救済する地蔵菩薩のこと。その名称・形像は典籍によって異なるが、一般には、地獄
道を化す金剛願、餓鬼道を化す金剛宝、畜生道を化す金剛悲、修羅道を化す金剛幢、

人間道を化す放光、天上を化す預天賀地蔵の総称とされる。日本では平安中期以来、六地蔵の信仰が盛んになり、岩手県・中尊寺、茨城県・六地蔵寺、新潟県・光照寺、京都府・大善寺など各地に六地蔵が安置された。六地蔵には、寺院・路傍・墓地などに祀られた六体の地蔵や、あるいは地蔵堂に祀られたもの、六か所の寺院や堂に安置されるもの、また各所の地蔵尊のうちから六か所を選んだものなどがある。また石灯籠などに6種の地蔵を刻んだ場合などもある。[佐々木章格]

殆どの墓地の入り口には手水桶と柄杓が置かれた水場があり、六地蔵が祀られている。各地にある六地蔵の中には興味あるものが少なからず見られる。石仏の本で六地蔵を取り上げたものはあまり見られない。石仏の本では江戸時代以降に造られたと思われるものはあまり取り上げられないようだ。近畿地方では特にその傾向が見られる。墓地に六地蔵を置くことの起原もわかっていない。

長岡京の神足母地には、座高が1m程度の六地蔵と五王の座像が置かれている。ここで取り挙げた知恩寺では六地蔵は置かれていない。

知恩寺の石仏に話を戻そう。

墓地入り口の石仏群の中央の2体の地蔵は、共に2mを越えると思われる大型の地蔵である。左の地蔵は少し微笑んでいるように見える。右の地蔵の顔は人間臭い感じがする。顔だけ見れば、こんな感じの人がいても可笑しくないと思えるほどである。足元にある10体ほどの小石仏は無縁仏と思われる。

次の写真は、この2体の地蔵のポートレートである



門より右手に進むと、次の地蔵が目につく。後背が付いているが、通常の厚肉彫りよりは丸彫りに近い。胸から腹にかけて黒くなっているのは、火災の後と思われるが、上で引用した「百萬遍知恩寺の歴史」には、火災の記事は書かれていない。



墓地の通常の区画に設置されていることと、膝元に線香立てが置かれていることから、墓標仏であろう。この地蔵の顔は前の丸彫りの地蔵以上に人間臭い。鉢巻をさせたら、八百屋か魚屋のおっさんに居そうな感じである。

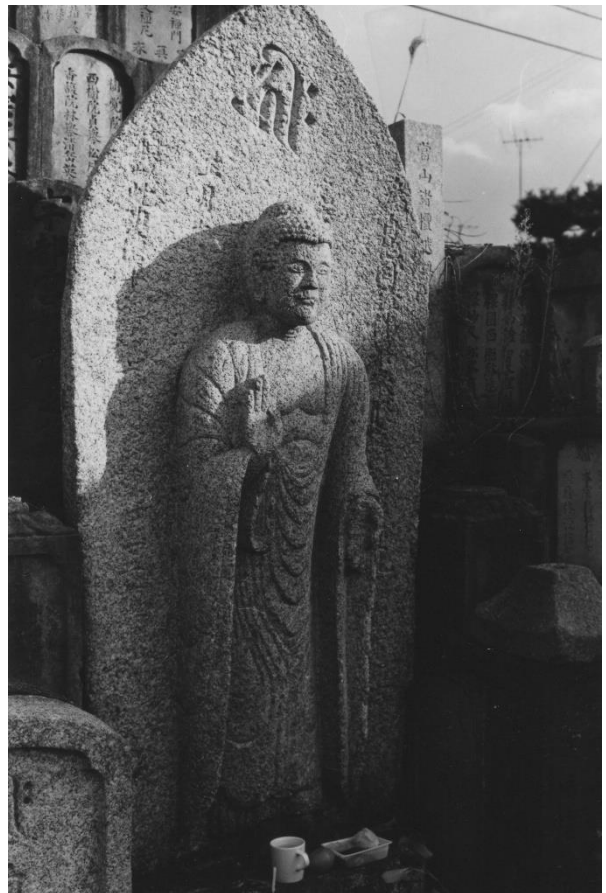
さらに進んだ奥に上の写真のように。コンクリー製の3段の基壇に無縁
仏を層状に配置したもので、小塔のようでもある。

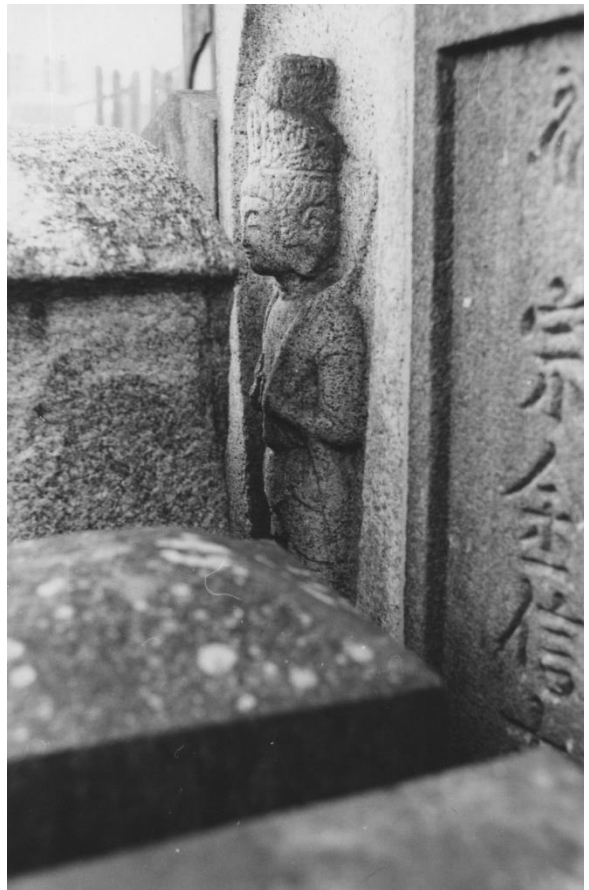


次の写真は、現在の状況である。これは Google map のストリート・ビ
ューの写真をスクリーン・ショットで得たものをトリミングしたものであ
る。これからは、最上層に置かれていた如来像が五輪塔に置き換わってい
る。



この無縁仏群には興味ある石仏が多数配置されている。これらの幾つかを掲げておく。







墓地のⅠ区画に、五劫思惟阿弥陀仏を墓標仏としているものが見受けられる。





長い間考え続けたため、髪の毛が増えてしまったというユーモアである。
五劫がどれほど長いものか調べてみた。

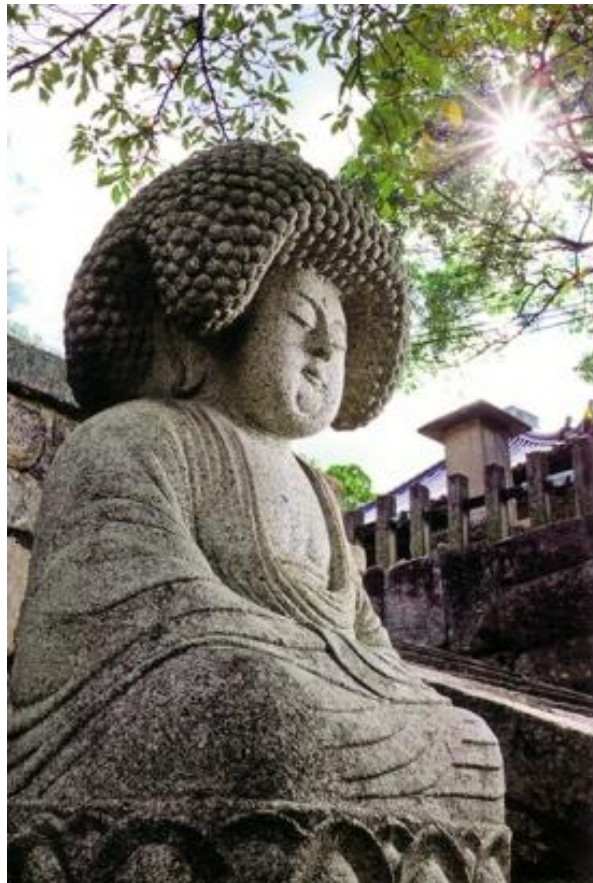
コトバンク「劫」精選版 日本国語大辞典「劫」の解説

kalpa の音訳「劫波」の略。きわめて長い時間。一般に、雑阿含經の説くところから従って、天人が方一由旬（四十里）の大石を薄衣で百年に一度払い、石は摩滅しても終わらない長い時間といい、また、方四十里の城にケシを満たして、百年に一度、一粒ずつとり去りケシはなくなっても終わらない長い時間という。なお、劫には小中大の大きさの段階があり、また劫の性質としてそれぞれ二十小劫からなる成・住・壊・

空の四劫があって、循環すると説かれる。

上の五劫思惟阿弥陀仏の写真は光明寺で撮ったものと思っていた。

光明寺のホーム・ページで「[五劫思惟阿弥陀仏](#)」を見つけた。ここに次の写真が載っている。写真を比較しても全くの別物である。さらに、右側に移っているのは三重の塔への階段で、場所も記憶と異なっている、



また、次の解説が書かれている。

五劫思惟の阿弥陀仏は、通常の阿弥陀仏と違い頭髪(螺髮)がかぶさるような非常

に大きな髪型が特徴です。無量寿経によりますと、阿弥陀仏が法蔵菩薩の時、もろもろの衆生を救わんと五劫の間ただひたすら思惟をこらし四十八願をたて、修行をされ阿弥陀仏となられたとあり、五劫思惟された時のお姿をあらわしたものです。そのような気の遠くなるような長い時間、思惟をこらし修行をされた結果、髪の毛が伸びて渦高く螺髪を積み重ねた頭となられた様子を表したのが五劫思惟阿弥陀仏で、全国でも16体ほどしかみられないという珍しいお姿です。

落語の「寿限無寿限無、五劫のすり切れ」はここからきています。

金戒光明寺の五劫思惟阿弥陀仏は、特にめずらしく石で彫刻された石仏で、江戸時代中頃の制作と思われます。

知恩寺と光明寺は、吉田山の北西と東南に位置しているが、そんなに離なれているわけではなく、共に浄土宗の寺である。両寺に類似の墓標仏があることはこれらを製作した石工(集団)の存在があるのではないか。

IRODORI→「[五劫思惟阿弥陀仏巡り](#)」は16カ所の五劫思惟阿弥陀仏の参拝記録である。

あとがき

石仏写真の 1 章として知恩寺を取り上げたが初めから予定していたわけではない。当初は別の所を検討したが、ある程度引き伸ばした写真がまとまっているのを、年代順に探していくうちに、知恩寺に行き当たった。個々の写真は撮った記憶があるが、全体として、これらの写真を撮った印象がない。本稿で書いた印象は、撮影時には抱いていたものではなく、写真を眺めていて浮かんできたものである。墓地で写真を撮ったあと、撮影の経緯を思い出せないことが少なくない。それどころか、大きい墓地では現在いる場所がわからなくなることも多い。多くの墓標は、基礎からでも 1.5m 程度であるから迷うことはない。整備された墓地は、新興団地と似た感じを抱いた。

知恩寺のように中・大型の丸彫り墓標仏が見られるの所はそれほど多くない。一乗谷や武生に見られるのは、時代も古く立派ではあるが、殆どが、無縁仏となっている。安曇川の玉泉寺のもの幾つかは墓標仏ではないかと想っている。鵜川 48 体仏は、その由緒から供養の為で、墓標仏とは言えないが、大沢池(大覚寺)・小町寺には似た石仏が残されている。

墓地は入り口に置かれている六地藏と無縁仏を除くと、石仏があるのはそれほど多くはない。これより、墓地はあまり訪れていない。

墓地で写真を撮っていると何か後ろめたい気分になることがある。墓地

は春秋の彼岸を除けば、人に出会うことは殆どない。300 基の墓地では、命日は 1 日に 1 つである。お参りは 15 分程度で終わるから、それ以外は無人の状態になる。

写真を撮るという立場から、お寺を市街地型と郊外型に分けてみた。これに、両者の複合型として本山型を加えてよいのかもしれない。市街地型は、墓地を含む寺域が塀で囲まれ、出入り口には門が設置されている。基本的には駐車場はない。小都市では、外部に駐車場を設ける所も現れた。郊外型は基本的には墓地を除いたものである。山門に相当する門があるが、平安京の朱雀門のようなものが多い。ここでは、門の近くと墓地の近くに駐車場がある。札所観音が祀られている所もある。境内に関しては‘立ち入り禁止’の場所以外では写真を撮ることはほぼ問題ない。建物の写真に関しては、著作権法で‘建物の肖像権’に関する定めがある。筆者の大雑把な解釈は、“普通に風景写真としての撮影は可能”で、公表してもほぼ問題はない。ただし、広告として用いる場合や加工して公表する場合には問題があり、訴訟になった例もある。人が写っていたりするときなどは、個人情報保護法による制約がある。

「[Web で著作権法講義](#)」によれば、“著作権侵害とは、著作者の権利(著作者人格権・著作権)や出版権、著作隣接権を侵害する行為をいいます。原則として、著作権侵害による著作権法違反の罪は親告罪です(123 条)。親告罪とは、公訴の提起に告訴を必要とする犯罪のことをいいます。告訴

できるのは著作権侵害の被害者です(刑事訴訟法 230 条)。”

無縁仏でない墓標仏に上記を援用すれば、“墓地の通路からの撮影は可能であるが、所有者の個人情報には留意することが必要である。また、写真としての補正以外の加工はすべきでない。”というのが現在の考えである。